

コウノリ湿地ネットニュースター☆

# パタパタ

No.

25

コウノリ湿地ネット

🏠 豊岡市城崎町今津 1362

☎ 0796-20-8560

✉ toshima8560@iris.eonet.ne.jp

🌐 <http://wac-s.net>

今年も「ハチゴロウの戸島湿地まつり」を開催しました。ここ数年、下島池の大掃除で行き場の無くなった魚達の救出大作戦にも同時に参加しています。水を抜いたどろどろの池。最近では特に経験することのなくなったどろどろに挑む子どもたちの雄姿です。



2014年10月19日 下島池でドロドロになりながら魚を追いかける子どもたち

## 目次

●いいことづくめの田んぼビオトープをすすめよう	1
●2014年豊岡野外コウノリの繁殖状況	4
●ハチゴロウの戸島湿地まつり	6
●戸島湿地便り	8
●おもうこと・編集後記	10



2014年7月19, 20日と2日にわたって「第5回コウノリ未来・国際会議」が開かれました。

また、それに先立ち、18日にコウノリ生息地保全協議会主催の「コウノリが暮らす地域連携かいぎ」が開かれました。各会議にはコウノリの飛来した各地から参加頂きました。

19日の夜には当会主催の「市民交流会」も開かれ、各地に飛来したコウノリの様子が発表されました。海外への初飛行となる韓国からは、コウノリを迎えて喜びいっぱいの地元の方たちがたくさんお見えでした。話したいことが皆さんたくさんありすぎて、本当ににぎやかな交流会となりました。

写真左上から下へ、18日の地域連携かいぎ、戸島湿地を訪問された韓国の方たち、本会議での基調講演をされた、ホルガ・シュルツさんと和歌山からのお客様が戸島で語らいを、右上は市民交流会でJ0057の様子を話される和歌山の方たち。

## いいことづくめの田んぼビオトープをすすめよう

コウノリ湿地ネット 代表 佐竹節夫

日本列島は今年もいろんな災害に見舞われた。台風の襲来を何度も受け、御嶽山の突然の噴火まであった。各地で大きな被害を被り死者も多数出た。昨今の異常気象現象や台風の様子を見ていると、今後ますますひどくなりそうでとても不安になる。しかも、雲の動きや台風の進路次第で、豊岡がいつ「当たる」か分からない。当然のことながら、少しでも減災になるようなまちづくりをしていくことが最重要課題だ。

8月に広島で起こった大きな土砂災害(扇状地の住宅地に被害が集中)は、豊岡のまちづくりに根本的なことを教えてくれているように思う。防災の専門家(京都大学防災研究所)曰く、「山を切ったり盛ったりしないで、地形なりに住むような開発形態が必要」と。

冷静に考えてみれば至極当たり前のことなのだが、日常生活の中ではついつい経済思考や効率主義が優先してしまう。改めてこれからの豊岡について、自戒を込めて考えてみよう。

### 「豊岡盆地」という地形

市の中心区域は、豊岡盆地と呼ばれる。コウノリの最後の生息地だったところだ。今では平野部に田んぼが広がり市街地が形成されているが、かつては小高い山に囲まれたすり鉢状の入り江(内湾)だった。すり鉢の周りの山は少しずつ海水によって浸食され、かつ、流域面積約 1,300 km<sup>2</sup>を有する円山川水系の上・中流部から流出した土砂が堆積し、約2万年の歳月をかけて現在の平野が形成された。地盤高はというと、単に水の力で埋まっただけだから基本的には海水面と同レベルになる。実際、(現在は)中央を流れる円山川は、出石川との合流地点(河口から16km)以北の河川勾配がないに等しい。だから河川や水路は海水が忍び込む汽水域であり、地盤は軟弱だ。今も橋梁や高層ビルの建設には 40~60mもの杭を打たねばならない。豊岡盆地とは、汽水の湿地帯(ウエットランド)なのである。

魚や水鳥、水生生物には絶好の環境を提供してきたのだが、人間の生活には厳しい試練を与えてきた。洪水だ。河川勾配がないうえに、盆地北端(河口から7.2km、赤石、森津地区)からは急峻な山が迫ってボトルネックになっているので、ひとたび大雨になると水が滞留してしまう。そのため、先人はもっぱら山裾に居を求め、石垣を積んで水害を防いだ。高水敷の調整には玄武岩が役に立った。ヨシ原だった低湿地は、コツコツと田んぼに開墾し立派な水田地帯に仕上げてきた。

以上が豊岡盆地の地形と生活史の基本だ。事あるごとに触れられてきたので、市民はみんな分かっているはずだ。この地形なりに生活を営むこと。自然の摂理に逆らえば、とんでもない逆襲に遭うこと。自然は恐ろしいけど知恵を働かせれば豊かな共生社会を営めることを。先人たちが長い年月の過程で築き、私たちに引き継いできたことを、今、どれだけ守り、活かしているのだろう。

例えば、下鶴井地内に計画されている運動公園。(※)盆地下流域の田んぼを約9haもつぶして3.5m嵩上げし、運動場や駐車場にしようとするものだ。すり鉢の中に土塊を投げ入れる行為である。溢れる水は機械(ポンプ)で汲み取るとのこと。まさに先人が築いた文化をあざ笑うがごとしだ。人間の力任せの行為は、どこかが歪になり、弱い所にしわ寄せが来ないか。自然のしっぺ返しが恐ろしい。

課題は、住宅地や平野部にいかに水をゆっくり流し、水勢を弱めることではないか。

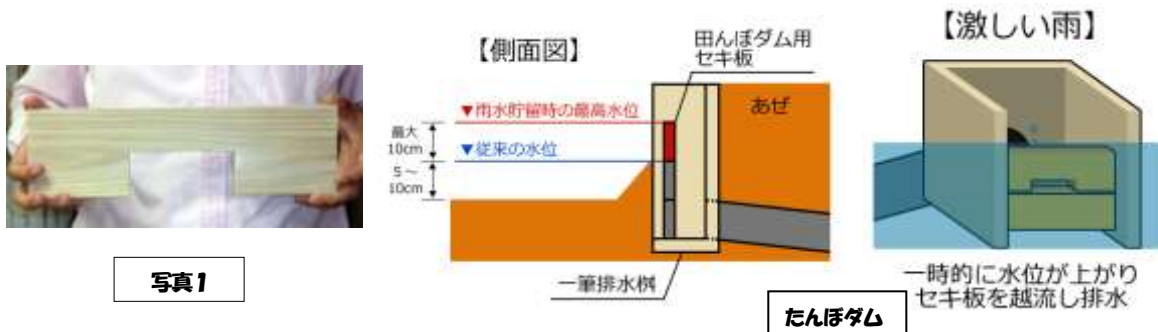
(※)残念ながら、計画は淡々と進行しているのです。

### ① 兵庫県の総合治水条例と田んぼダム

平成 24 年 4 月に施行された兵庫県総合治水条例は、「近年、台風等による大雨や集中豪雨、局地的大

雨が増え、河川や下水道の整備といったこれまでの治水対策だけで被害を防ぐことは困難」との見地から、雨水を貯めて流水を抑える「流域対策」などの「総合治水」を提唱している。流域対策の項目(第4章)を見ると、調整池の設置及び保全、土地等の雨水貯留浸透機能、遊水機能の維持、森林の整備及び保全などが掲げられている。まさに豊岡盆地が取り組むべき内容だ。現在、条例の趣旨に基づいて様々な施策が進められているが、その一つが「田んぼダム」である。

「田んぼダム」とは、それぞれの田んぼの落水口に“切欠きのある堰板”(写真1参照)を設置し、大雨の際に最大10cmの雨水を貯留しようとするものだ。雨水が10cmに達するまでは5cm×10cmの切欠き穴で少しずつ排出するので、河川への急激な流出を抑えることができるというわけ。



朝来、豊岡土地改良センターによれば、取組み初年度の今年は管内12地域で58.6haの田んぼで実施されているそうだ。仮に管内の全水田で実施されると7,822,000トンの水を貯留できるらしい。さすがに全水田は困難だろうし、やったとしても豊岡盆地の水位は数cmしか下がらないかもしれない。しかし、流水の打撃を直接受ける周辺の住宅や農地への効果は大きいのではないかと。とくに、農家が下流の洪水被害軽減のために立ち上がった意義は極めて大きなものがあると思う。今後、田んぼダムが順調に広がっていくことを期待している。

② ビオトープづくりも小さいながら防災機能あり

豊岡の休耕田を活用した「ビオトープ水田」は、平成13年にコウノリの郷公園の麓・祥雲寺地区の田んぼで始まった。当初は、来るべき放鳥に備えて近くにコウノリのえさ場を確保したい一心で農家をお願いしたのを覚えている。4枚ほどの田んぼからのスタートだった。取り組みをお願いする市は、制度上の「調整水田」に生きもの増加対策分を上乗せして支払い、NPOコウノリ市民研究所は隣接田んぼを借地(サントリー一世界愛鳥基金助成金を活用)して、ここを「田んぼの学校」として親子の環境学習の場に展開した。

平成15年から兵庫県の補助対象事業となり、市が農家に「田んぼをコウノリの生息地(生物多様性)にし、子供たちへの環境学習の場にする事業」として正式に制度化され(平成23年度から市の単独事業へ)、今日に至っている。今年度では、12.4haの田んぼで取り組まれている。場所の配置は、子供への教育的観点重視から各小学校区で1か所を基本に置いているとのこと。現在、29校区のうち16校区で実施中。



写真2

(写真2) 当会が実施しているククビ湿地

常時湛水のビオトープ田は畔が補強されるので、治水面から見ても一定の貯水効果がある。管理していると、自然に生きものの動向に目が向く。とくにコウノリが舞い降りてくれると、どこでも大いに盛り上がる。子供たちがやってくると、さらに盛り上がる。つまり、年中、農閑期であっても田んぼに目が注がれるというわけだ。

豊岡は、全国各地同様に、いや湿地帯だったが故にそれ以上に田んぼの近代化策を推進してきた。結

果、必然的に生物多様性を弱めてきたが、このビオトープ水田の事業は、少しでも自然再生し多面的に活用しようとするもので、盆地の(それ以外でも)地形に沿った事業と思う。まだ田んぼダム堰板の設置は必須条件には至っていないので、もう一步、ぜひ検討してほしい。

### ③ 放棄田の自然再生

当会が地域の人と一緒に取り組んでいる一つが、田結地区での耕作放棄田の湿地再生だ。ここは谷あいにも小区画の棚田が連なっていたが、奥部から徐々に耕作放棄され、平成19年以降は全面的に稲作をされなくなった。年月の経過とともに畔が崩れ、水路は埋まって緩やかな傾斜地となり、所々が湿地状になったまま放置されていた。大雨になると、山から流れ出た雨水がそのまま上面を流れ、下流の住宅地を直撃したこともあったという。平成20年4月、突然にコウノリ(戸島ペア)が飛来し、餌を求めて舞い降りたことから湿地づくりが始まった。小さな区画の湿地(池)を掘り、新たな畔を設けて湛水した。ビオトープ田と同様の、貯水と流水調整にも一定の効果はあると感じている。湿地は補修したりやり方を変えたりして、今日に至っている(※1)

(写真3)山際湿地 山からの流水を一度ここで受け止めて貯水する。モリアオガエルやヒキガエルの繁殖場所になっている。

(写真4)昨年度では、視察に行った赤穂市の田んぼダムからヒントを得て排水調整の仕方を工夫してみた。木杭を打ち丸太と土で排水溝を作ってみたのだ。読者の皆さんの感想はどうでしょうか。

(写真5)棚田状に水を湛えたサトヤマ。美しい!

(※1)当会発行の「田結地区の挑戦」に詳細を記しているのので、参照ください。



写真3



写真4



写真5

### まとめ

本稿では、田んぼで行われている減災の取り組みを3つのパターンで紹介した。いずれも少しの労力で行えるのが特徴だ。田んぼダムは、稲作実施中の田んぼが持つ多面的機能を発揮したもので、多くの方が田んぼの力をより一層感じられるようになればうれしい限りだ。

田んぼがやむなく休耕あるいは耕作放棄された後、放置されたままでは荒廃が進むだけだ。これを湛水し、畔を補修し、水回りに関心を払うだけで水生生物は喜んで帰ってくる。東アジアモンスーン地帯である日本では、生物多様性の底力はまだまだ強いのである。カエルやドジョウなどが増えてくれば次々と食物連鎖が始まってくる。その様子を見計らって(ひょっとすると)コウノリが舞い降りてくるかもしれない。充実感、達成感が味わえ、スコップを握る手にも力が入るというわけだ。子供が参加すれば、一緒になってさらに楽しい。

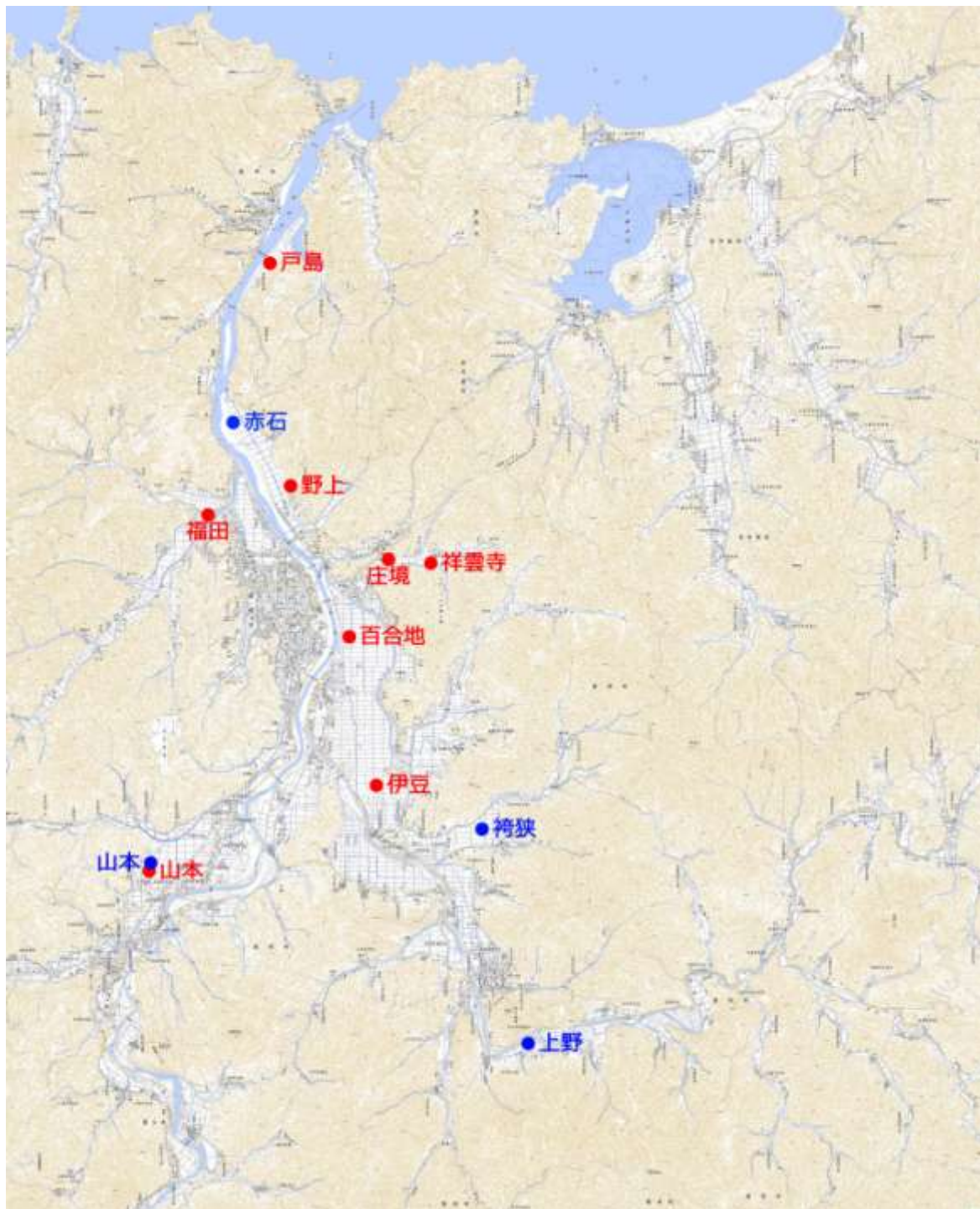
山裾の池に目が行けば、山の方にも目が向く。シカによって変わってしまった山の姿に驚くはずだ。研究者のモニタリングもできる。知識が増える。他の人に知らせたくなる。交流が始まる。いいことづくめだ。全国各地に田んぼビオトープが広がることを願っている。

## 2014年豊岡野外コウノリの繁殖状況

コウノリ湿地ネット会員 宮村さち子

2014年豊岡の野外でのコウノリの繁殖が8月11日の戸島ヒナの巣立ちをもって終了した。今年は8ペアから16羽が巣立ちした。前号で紹介した今年の繁殖状況をその後の動きを中心に振り返ってみたい。

### 2014年コウノリ繁殖場所一覧



※赤丸・赤文字は孵化、巣立ちした巣塔 ※青丸は産卵のみ、あるいは孵化に至らなかったペア

★戸島人工巣塔(♂J0391♀J0294)

4月14日♀J0017の襲撃でヒナ3羽が死亡する。第2クラッチで8月9日～11日に3羽(♂J0096・♂J0097・♂J0098)が巣立つ

★野上人工巣塔(♂J0001♀J0362)

2羽孵化 1羽(♀J0087)巣立ち

★福田人工巣塔(♂J0020♀J0004)

3羽巣立ち(♂J0088・♀J0089・♀J0090) J0088は巣立ち時に風切羽が完全に伸びていなかったため、巣立ち直後の飛行は不安定であった。しかし現在は風切羽も伸びて、他の幼鳥との違いはなくなった。J0090は先天的なものか、後天的(巣内で親鳥に踏まれる等)なものか不明だが、左足に障害があり、歩行時に上げた左足が右に直角に曲がって右足に当たり、スムーズな歩行ができず、採餌行動が困難。よく、よろめいている。(※)

親♀J0004はヒナ巣立ち後福田巣塔近くで死亡が確認される

★庄境人工巣塔(♂J0021♀J0012)

2羽孵化 1羽巣立ち(♂J0083)

★郷公園内仮設人工巣塔(♂J0405♀エヒメ)

4羽孵化 3羽巣立ち(♀J0084・♀J0085・♂J0086)

親♂J0405はヒナ巣立ち後、事故で郷公園に収容される。再放鳥は困難とのこと。

★百合地人工巣塔(♂J0275♀0228)

第1クラッチ抱卵中止第2クラッチで8月3日に1羽巣立ち(♀J0095) J0095は巣立ち後事故により死亡

★伊豆人工巣塔(♂J0381♀J0296)

1羽巣立ち(♂J0094)

★山本人工巣塔(♂J0011♀J0399)

3羽巣立ち(♂J0091・♂J0092・♀J0093)昨年♂J0008の死亡で1ペア(♂J0008♀J0010 永留ペア)減以降、新ペアによる巣立ちはなかった。

その他のペアの動向は24号に掲載したとおりである。

(※)その後10月23日を最後に所在を確認できなかったJ0090は、31日に死亡しているのが確認された。

## 考察

1、♀J0017の戸島巣塔♀J0294への執拗な攻撃が、子殺し行動までエスカレートした。その後J0017は♂J0426と再ペアを形成し戸島への襲撃は基本的になくなったが、秋、♀J0030の戸島巣塔周辺への飛来と巣塔へ降りる行動が目撃され、新たな種内間の闘争が懸念される。

♀J0095は巣立ち後間もない8月29日、巣立ちした百合地巣塔から南約700メートルに位置する携帯電話基地局アンテナの下で死亡が確認された。♀J0016がJ0095を追いまわし、追い払っていたことが目撃されており、J0095の死亡もJ0016が絡んでいる可能性がある。

♀J0004は福田巣塔から南東約300メートルの鉄塔の下で死亡が確認された。♀J0010が周辺で目撃されるようになった時期とも重なり、種内間の闘争の結果の可能性もある。

以上可能性も含めて考えると種内間メス同士の争いが課題となっているように思われる。



20140808 巣立ち直前の戸島ヒナ3羽



20141007 左足が曲がっているJ0090  
羽繕いが出来ないのか、どろどろである

2、2014年8月♂J0405 事故保護収容により祥雲寺ペアが解消された。2007年 J0232 2011年 J0389・J0408 2012年 J0058 2013年 J0008 に続いていずれもペア雄の事故死で、6ペアが崩壊したことになる。過去の事例では、ペア崩壊後残った雌は比較的短い間に新しいペアを形成しており、♂J0426 ♀J0017 と ♂J0020 ♀J0010 は今後の継続した観察が必要である。

3、日高町山本ペア♂J0011 ♀J0399 は3年連続3羽巣立ちと注目に値する。一方で豊岡の中では最も広い平野部を望む百合地巣塔の巣立ち数が少ないのは気になるところである。

以上、今年の繁殖状況を考えてみると、豊岡盆地はもう、コウノリにとって飽和状態といえるのではないだろうか。これまではコウノリの力で順調すぎる繁殖を続けてきたが、これからは人間がコウノリのために様々な試みをすべき時だと思う。今年もたくさんのコウノリが全国へ飛んで行った。全国にコウノリの個体群を作るために、今すべきことは、その一つとして、豊岡外への定着のために、ペアのコウノリの放鳥を提案したい。今行われている幼鳥の自然放鳥に加え、彼らの親も共に放鳥する。どうだろうか。

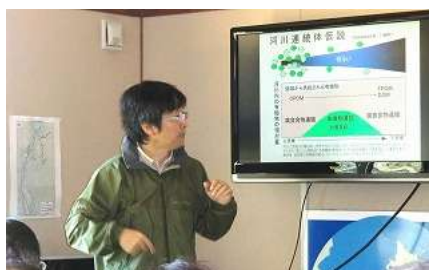


★奄美大島で暮らしている J0067 中央の写真は 2014 年 9 月 5 日に飛来した J0066 と一緒にのところ(撮影 奥昭仁氏)★

## ハチゴロウの戸島湿地まつり (2014年10月19日開催)

パタパタ編集部

戸島湿地まつりも今年で6回目になりました。今回も講演会・バザー・もちまき、魚の救出作戦(これは下島区主催ですが、当会も協力して、捕獲した魚は戸島湿地に放流してもらいます)とお馴染みになってきた行事の数々が行われました。



戸島湿地管理棟では兵庫県立大学大学院の准教授である、佐川志朗さんによる講演が行われ、同時に下島池での魚の救出大作戦も行われました。

佐川さんは、魚類が専門で、今回は「川の環境と魚の住み場所」と題して、魚が孵化し、成長していける環境はどんなものかを話していただきました。



魚の救出大作戦では、最初は水が落ちて、どろどろになっている池を見て、しり込みをしていた子供たちが、ウェーダーを着て池に入ると、夢中になり魚を追い掛け回す姿が笑いを誘っていました。泥だらけになった子供たちは本当に楽しそうで、来年は私も池に入ろうかな、なんて、思っていました。

昨年末に泥揚げのため池の掃除をしたとのことで、今年は魚は少なめでしたが、それでも水を満杯にした軽トラックいっぱいの魚でした。両生類を含めとれたのは18種類。ほとんどを戸島湿地に放流し、一部を水



槽に入れて、コウノトリ市民研究所の北垣さんから説明を聞きました。今年捕獲したのは魚類16種、両生類2種の18種類でした。



戸島湿地管理棟前の駐車場ではまたまた恒例のバザーが開かれました。



エコハウスの前では、「豊岡市建築大工組合」による在来工法による家の組上げのデモンストレーションもありました。



最後はもちまきです。なんだか、餅まきの前にどっと人が増えたような…。みんなで楽しく拾い、景品を手にして湿地まつりは終わりとなりました。また来年も会いましょう。



城崎小学校3年生の活動管理棟に展示してあります



今日も見守ってくれました

ハチゴロウの戸島湿地便り（7～10月編）

戸島湿地管理棟 森 薫

～夏に3羽巣立ちました～

4月14日にヒナ3羽が死亡した後、戸島ペアは翌々日の16日には早くも交尾行動を始め、6月16日には3羽が孵化しました。市内の人工巣塔から巣立ちのニュースが聞こえる頃、戸島ではやっとヒナの上半身が見えはじめ、7月4日の朝、1羽が立ち上がり、18日には3羽のヒナが揃って立っているのを確認しました。真



20140508 第2クラック産卵確認

夏の日差しが照り付けるなか、ヒナの成長はどうか・・・と心

配しながらの観察が続きました。そんな中でも親鳥は水や餌を運び、懸命に子育てをし、8月9日・11日・12日に巣立ちました。巣立ちの感動を、分かち合いたいと毎年『早朝観察会』を行っています。今年も夏休みを利用して観光に来られた方や、巣立ちを迎えるときを心待ちにして、朝夕何度も足を運ばれた方、閉館時間までじっと待っておられた方など、大勢の方の心をのせて真夏の太陽のもと、3羽のヒナは元気に飛びたちました。



～湿地には～

兵庫県損害保険代理業協会の皆様がCSR活動としてモウソウチク駆除作業に来てくださいました。今年度は、モウソウチク駆除作業の際に刈った竹を粗砕機(チップパー)でチップ化し土壌の改良などに役立てたいと、日本損害保険代理業協会グリーン基金を活用して粗砕機をリースして実地しました。2か月後には、カブトムシが見つかり、生きものは答えてくれることを実感しています。また、豊岡総合高校インターアクトクラブの皆さんは、暑い盛り



カブトムシ



20140725 菱屋西小学校

に2回も湿地の草刈りをしてくださいました。東大阪市立菱屋西小学校5年生たちも「コウノリのために自分たちも何かしたい」という気持ちで、草刈りをしてくれました。小さな手で鎌を持ち、「A君がすごく頑張っていて、暑くてしんどかったけど私も頑張ろうと思った」との言葉が印象的でした。共に汗を流す体験がもたらす効果や、自分では気づかない『力』を友達から授かること、その喜びなどを私も子供たちとの草刈りによって教わりました。鎌の使い方も、きっと忘れられない体験となったことと思っています。

～管理棟には～

夏休みに入り今年も『JTB 城崎環境講座』(JTB西日本のCSR活動)を開催し、夏休みの自由研究のお手伝いをさせていただきました。コウノリからたくさんのが学べます。韓国に飛来したことをお話すると、早速、韓国のどんなところに飛んで行ったのか?と、そのことについて調べてみたいとタイムリーな話題を宿題に選ばれたお子さんがおられました。城崎温泉のお話もして、城崎生まれの私にとっても楽しい夏となりました。



20140725 JTB 環境講座

今年は『第5回コウノリ未来・国際かいぎ』が開催されたので、韓国イエサン郡より無農薬で黒米を栽培

されている農家の皆さんなど、海外からもたくさんの方が来館されました。視察に来られる方からはPRが行き届いているためか、自然再生の先進地と評価されているようです。しかし反対に、地元の方からは「コウノトリ様々だな」という声をよく聞きます。「コウノトリのおかげで」と「コウノトリばかり・・・」。市内の方は圧倒的に後者の方が多いように感じます。地元の方には、コウノトリの飛来先で、頑張っておられる方のお話や、全国に飛んで行っている様子、戸島人工巣塔での出来事などをお話すると、関心を寄せてくださいます。コウノトリに寄り添えるような、地道な活動が求められているように感じています。

#### ～ハチゴロウの戸島湿地検証事業が始まっています～

ハチゴロウの戸島湿地が整備され5年が経過しました。野生コウノトリ(ハチゴロウ)が舞い降りたことをきっかけに、円山川下流域のコウノトリの生息拠点として整備された当湿地では、竣工後も様々な「見直し改良」を行ってきました。5年間の取り組みや湿地の現状等进行分析・評価し、今後の管理運営や、市内外の各地で行われる湿地保全活動や自然再生活動等の取り組みに広く生かされることを目的に10月9日に検証委員会(委員長:兵庫県立大学三橋弘宗主任研究員)が設立されました。来年3月には報告書をまとめる予定です。



20141009 検証委員会

#### ～5年間を振り返って～

コウノトリ(戸島ペア)は、平成20年～26年の7年連続繁殖し、産卵数は26個、15羽のヒナが巣立ち、第3世代が7羽生まれています。繁殖期を迎えるごとに、交尾をするタイミングや、巣立つ前のヒナの仕草などが分かるようになってきました。反対に「繁殖妨害」「子殺し」(赤石ペアの攻撃によりヒナが死んでしまったことと、J0017の執拗な攻撃)とされていることについては、データをとるために録画を何回も見てみると、ヒナを殺してしまったことは結果であり、目的ではないのでは?と感じています。表現の仕方で、コウノトリの生態を把握する際に微妙に違ってくると思います。J0017に関しては、何度巣に降りてもヒナに攻撃をしませんでした。J0391が不在のときの2時間半に及ぶ攻撃のとき、ヒナの頭がモニターカメラに映った(ヒナが動いた)瞬間、嘴で突かれました。ヒナが動かなければ突かなかったのでは?と思えてなりません。(動いたものは餌だとみなした)自分の命を繋ぐために巣・雄が必要で攻撃の様は命がけです。『ひたすら』に『必死』です。『必死』という言葉の意味をコウノトリから教わりました。私の『必死』など・・・足元にも及びません。

湿地には、コウノトリの為に5年間(平成21年～25年)で1,732名の方がボランティア作業に来てくださり、共に汗を流しました。一度来られた方は、毎年続けて来て頂いています。戸島湿地を活動の場として認めて頂いたようで、私たちの励みとなっています。

管理棟へはこの5年間で、53,543人の来館者があり、多くの方と出会いました。コウノトリの観察に、散歩がてら、観光で、視察で・・・と、来館の動機は様々です。指定管理を受けた当初の説明では、セルフガイドとのことでしたが、極力お話させていただきたいと努めてきました。急ぎの報告等があったり、帳面のことが気になったりと、落ち着いた気持ちを引きずったままで対応して、申し訳なかったと悔やんだことも多々あります。商売には紋日(賑わう日)があり、管理棟の紋日も同じです。一般の方の休日、ゴールデンウィークが最大の紋日です。そして、私がたくさんの方に管理棟に来てほしいと願う私の紋日は巣立ちの頃です。コウノトリの巣立ちを間近で観察できる施設は日本でここだけとの自負で頑張れます。湿地の紋日は、ボランティアで湿地作業に来ていただく作業日で、たくさんの方に支えていただいていたいただき感謝しています。



## コウノトリ湿地ネット賛助会員名簿（新規入会）

### 個人会員

埼玉県川口市 大見享子

(2014年7月1日～10月31日)

有難うございました。これからもよろしくお願ひいたします。



### 思うこと

(コウノトリ湿地ネット代表 佐竹節夫)

本号直前の10月23日、運動公園に関する市の住民説明会が開催され、当会も出席した。貴重な機会だ、十分質問し、意見を言おう。「コウノトリのまち」なのだから、我々の主張に前向きな回答があるかもしれない。甘かった。完全に甘かった。冒頭に、市は用地買収を前にして最初から土地収用法を用いると宣言したのだ。

つまり、対象地は優良農地。しかも9haという大規模なので、正規に手続き(農振除外申請)すれば国・県の許可は順調には得られないだろう。ならば、権力者の伝家の宝刀で突き進もうというわけだ。この説明会は、収用法を適用するための形式手続だった。

それほどまでに田んぼを、農業をつぶしたいのかと、あせんとした。虚無感が漂い、涙も出ない。いや、ダメだ、ダメだ。こちらの覚悟が問われていると捉えよう。・・・けれども、すみません、今は文章が続きません。



### 編集後記

東京へ四泊五日の一人旅、『小椋佳 生前葬コンサート』のためにでかけた。一曲聞いては涙…。四日で全109曲。東京見物もせず、ホテルとNHKホールを往復するだけの四日間。小椋佳の言霊により、和み、励まされた日々が廻り、感無量の旅となった。(森)

今年の夏は猛暑を覚悟していたのに、あっさりと過ぎ去ってしまった。今はさわやかな秋を満喫しているところです。でも今年我が家ではちょっと気にかかることが…。それは毎年実を付けていたブルーベリー、柿がちっとも実らなかったこと。他の柿の木はたわわに実っているというのに。そして極めつけは毎年、いったいどうするんだ、というぐらいたくさんとれていたキウイがまたまたとても少ないこと。これは何か悪いことの前触れかもと心配です。え、何か食べられるものばかり植えているですって?いえいえ、まだイチジクもありますよ。(宮村)



### 早川会員の野鳥観察会のお知らせ

毎月一回、戸島湿地で行われている野鳥観察会を、  
12月は15日(月曜)に開催いたします。  
ハチゴロウの戸島湿地管理棟に10時に集合してください。